

令和5年度 国立三瓶青少年交流の家教育事業 全国高校生体験活動顕彰制度
地域探究プログラム オリエンテーション合宿

1 趣旨

- 島根県立隠岐島前高等学校新入生が三瓶周辺地域の方の講話を聴くことや石見銀山でフィールドワークに取り組むことを通して、高校に戻ってからの実践活動に役立てるための探究のプロセスを体験的に学ぶ。
- 人間関係づくりプログラムや登山などの共通体験により、新入生の良好な人間関係構築への意欲付けを図る。

2 事業の概要

(1) 期間

令和5年5月10日(水)～5月14日(日)

(2) 会場

国立三瓶青少年交流の家、大田市大森町(石見銀山周辺)

(3) 対象

島根県立隠岐島前高等学校1年生53人

※新入生のオリエンテーション合宿に関連付けて実施する。高校としての行事名は「地域探究CAMP」。

(4) 協力者

【2日目:クロス登山「SAP登山」】・・・当所研修指導員2人

○平野 勝久 氏 ○神田 均 氏

【3日目:地域人講話】・・・三瓶周辺地域に居住地や勤務地のある方12人

○江口 祐輔 氏(おおち山くじら研究所 所長) ○中村 唯史 氏(島根県立三瓶自然館サヒメル 調整幹)
○和田 譲二 氏(NPO法人 緑と水の連絡会議) ○村田 有郷 氏(高田八幡宮 宮司)
○西村 崇司 氏(大田市山村留学センター 主任) ○神田 智 氏(大田市教育委員会 大田市派遣社会教育主事)
○福間 聖治 氏(福間牧場) ○仲野 義文 氏(石見銀山資料館 館長)
○山本 ゆう 氏(石見家畜診療所 獣医) ○大谷 康雄 氏(大田市多根地区自治会長)
○渡利 章香 氏(温泉津女子会) ○飯田 勝美 氏(飯田電器・歩くスキー研修指導員)

(5) 日程

【1日目:5月10日(水)】

16:00 交流の家着
16:10～16:30 交流の家利用オリエンテーション
17:00～17:30 タベのつどい
17:30～18:30 夕食、休憩
18:30～20:00 ☆SAPI～アイスブレイク編～
20:00～22:30 入浴、休憩、就寝準備
22:30～ 就寝

【2日目:5月11日(木)】

6:30～7:00 起床、身辺整理
7:00～7:30 ラジオ体操、清掃
7:30～9:00 朝食、活動準備
9:00～9:30 ☆グループワーク(目標設定)
9:30～15:30 ☆学級別クロス登山(SAP登山)
15:30～17:00 休憩
17:00～17:30 タベのつどい
17:30～19:00 夕食、休憩
19:00～20:00 ☆登山の振り返り
20:00～22:30 入浴、休憩、就寝準備
22:30～ 就寝

※日程中の☆で表記している活動は、カリキュラムBに特に関わりが深い活動であることを示すものである。

【3日目:5月12日(金)】

6:30～ 7:00	起床、身辺整理
7:00～ 7:30	ラジオ体操、清掃
7:30～ 9:00	朝食、活動準備
9:00～11:00	☆S A P II～課題解決編～
11:30～12:00	☆地域探究プログラムガイダンス 地域人講話説明
12:00～13:00	昼食、休憩、準備
13:00～15:00	☆地域人講話
15:00～16:00	☆講話内容の班内共有・まとめ
16:00～16:45	☆講話の中での「!」と「?」発表
17:00～17:30	夕べのつどい
17:30～19:00	夕食、休憩
19:00～20:30	石見銀山フィールドワーク準備
20:30～22:30	入浴、休憩、就寝準備
22:30～	就寝

※ 日程中の☆ で表記している活動は、カリキュラムBに特に関わりが深い活動であることを示すものである。

【4日目:5月13日(土)】

6:30～ 7:00	起床、身辺整理
7:00～ 7:30	ラジオ体操、清掃
7:30～ 9:00	朝食、活動準備
9:15～14:30	☆石見銀山フィールドワーク
14:30～17:00	まとめ・休憩
17:00～17:30	夕べのつどい
17:30～19:00	夕食、休憩
19:00～20:30	キャンドルのつどい ※雨天のためファイヤーストームから変更
20:30～22:30	入浴、休憩、就寝準備
22:30～	就寝

【5日目:5月14日(日)】

6:30～ 7:00	起床、身辺整理
7:00～ 7:30	ラジオ体操、清掃
7:30～ 9:00	朝食、退所点検、活動準備
9:00～ 9:50	☆振り返り(石見銀山フィールドワーク のまとめ・発表)
10:00～10:50	☆まとめガイダンス
11:00	交流の家発

3 事業の特色

本事業は、「全国高校生体験活動顕彰制度地域探究プログラム オリエンテーション合宿」として島根県立隠岐島前高等学校と連携し、今年度初めて実施したものである。当所では「カリキュラムB」を採択し、以下の点に留意して企画、運営に当たった。

(1) プログラムデザインと企画のポイント**① 弾力的な合宿日程の設定**

連携先の島根県立隠岐島前高校は、島根半島沖約 60 kmの日本海に浮かぶ隠岐島前地域(西ノ島、海士町、知夫村)にある唯一の高校である。人口減少と島外の高校への進学者の増加を背景として入学者が減少したことにより、一時は廃校の危機にあった。このため、学校・行政・地域住民の協働で「島留学」制度に代表されるような取組を考案して実施したことにより、高校の魅力化が図られた。現在では、離島にありながら日本全国から入学志願者が集まる高校に変容したことは有名である。文部科学省の普通科改革の流れの先駆けとして、昨年度から創設された新学科「地域共創科」(生徒は2年生進級時に普通科と地域共創科のどちらかを選択する。)の存在は、隠岐島前高校の大きな魅力である。日本全国から集まった新入生にとって、1学期は新しく出会った仲間との人間関係づくりの大切な時期である。このため、引率教員には、この合宿で生徒に当所の人間関係づくりプログラム S A P (Sanbe Adventure Program) を必ず体験させたいという思いがあった。また、生徒に島根県を代表する山である三瓶山の登山、石見銀山のあの大森地区でのフィールドワークをさせたいという思いがあるなど、高校として、集団宿泊研修での体験活動に対する様々なニーズがあった。

今年度のオリエンテーション合宿で採択したカリキュラムBは、全7科目中の「試行」分野4科目分を1泊2日で実施するのが基本形である。今回の合宿の日程自体は全4泊5日の計画であるが、隠岐島前高校のある島から当所がある三瓶山までの移動にはフェリーと自動車を使って半日以上を要するため、行き帰りの2日間を除くと、本所で活動できる時間は実質3日間であった。そこで、高校から要望があった活動とカリキュラムBの各科目との関連性を明確にすることにより、限られた時間の中でカリキュラムのねらいを達成して高校としてのニーズを満たせる合宿日程の設定に努めた。また、学校に戻ってからの「実

践活動」に関わる教員の負担軽減のため、「実践活動のためのガイダンス」の時間を合宿の最後に組み込むなど、弾力的な合宿日程の設定に努めた。

② 人や事物との出会いの場の設定

高校のニーズの一つである三瓶山登山については、当所では、集団で困難に立ち向かう体験を通して所属感や達成感が醸成されるなど、児童生徒の人間関係づくりにとって有効な活動プログラムであると考えている。また、地域探究の視点で見ると、山頂から三瓶周辺地域を眺めることで生徒の三瓶地域への関心や、日本海の先にある隠岐地域への関心が高まることを期待できるなど、地域探究へのきっかけとして有効であると考え、この合宿での重要な活動の一つに位置付けた。

3日目の「地域人講話」の時間は、カリキュラム B「試行」分野の講義・演習①「地域づくりと探究」の科目として実施した。三瓶周辺地域（大田市、美郷町、飯南町）で暮らしたり、この地域で仕事に従事したりしている 12 人の方の講話を聴き、地域づくりの実践を探究のプロセス（課題の設定→情報の整理・分析→まとめ表現）に基づいて整理する中で生徒に探究のプロセスを疑似的に体験させたいと考えた。また、講話を聞き、三瓶地域と自分の地元や身の回りの大人と比較して、共通点や差異点に気付いたり、疑問を見いだしたりする中で、学校に戻ってからの探究活動への興味・関心が高まることを期待し、この合宿の要となる活動として設定した。

さらに、高校からの要望である石見銀山のフィールドワークについては、生徒が実際に銀山のある町を歩き巡る中で驚きや疑問点などを探したり、地域についての疑問を住民の方に質問したりすることを通して、課題の設定や情報収集などの地域探究のプロセスを実際に体験できる好機だと考えた。また、高校のある隠岐島前地域とは異なる県内他地域の様子を知り、地域探究への興味・関心が一層高まるなど、地域探究の観点から価値ある学びの機会になると考えられるため、カリキュラム B の「試行」分野では必須の活動ではないが、合宿の重要なプログラムの一つに位置付けた。

このように、三瓶周辺地域の人や、自然、文化、町並みなどの事物との出会いの場を多く設定することにより、生徒の地域探究への興味・関心と探究のプロセスの体験的な学びを引き出せるようにした。

(2) 運営(連携)のポイント

① 高校引率教員との事前・事中の細かな打ち合わせの実施

5月の合宿に向けて、年明けから半年かかりで準備を進めてきた。1月初旬には当所において高校の担当教員と教育魅力化コーディネーターとの最初の会合の場を設け、「地域探究プログラム」の概要について説明するとともに、合宿の活動内容についての要望の聞き取りを行った。3月下旬には、当所職員が高校を訪問し、合宿日程の大枠について打合せを行った。新年度になってからは、メールや電話を通して、各活動について高校側の担当教員と適宜連絡を取り合いながらプログラムの詳細を確定し、準備を進めた。また、4月末にはオンラインで高校の引率教員団との日程確認の打合せを実施し、当日を迎えた。

合宿期間中は、各活動実施前に必ず教員団と最終確認を行った。また、1日の終わりには、その日の振り返りと翌日のスケジュール確認を行い、検討が必要な事項については丁寧に協議することを大切にされた。これらの打合せを通して、高校の引率教員団の安心感につなげ、高校と施設で共通認識をもってプログラムを展開できるようにした。

② 「地域人材バンク」の活用と関係機関への相談、協力依頼

3日目の「地域人講話」の時間には、三瓶周辺地域の多様な職業に就く人や、地域愛と地域への強い課題意識をもち、多様な分野で活躍する方々の話を生徒に聴かせたいと考えた。そこで 12 人の地域講師の依頼に当たっては、野津前所長（現隠岐島前高校学校長）が在任中に中心となって構築した「地域人材バンク」を大いに活用した。過去 2 年間、新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、当所ではオリエンテーション合宿を計画どおりに実施できなかったことから、「地域人講話」を実現できていなかった。したがって、今回が初の本格運用であり、講師依頼時には、理解と協力を得るために丁寧な事業趣旨の説明を心掛けた。

4日目の石見銀山でのフィールドワークの実施に当たっては、地域人講話講師の一人でもあり、平素か

ら当所の運営に多大な支援をいただいている石見銀山資料館館長の仲野 義文氏に運営の留意点について助言を求めた。そして、仲野氏の助言を基に大森地区のまちづくりセンターに事前に情報提供し、まちづくりセンターを通して地区の各家庭に事前に情報を周知するよう協力を依頼した。このことにより、大森地区において、高校生が町歩きのフィールドワークを行い、住民にインタビューすることがあることを事前に知らせ、地域の理解と協力の下でフィールドワークを実施できるようにした。

③ 生徒の意識と態度を引き出すための手立ての工夫

各活動において、目的意識をもって真剣に活動に取り組もうとする生徒の意識と態度を引き出すため、手立ての工夫を心掛けた。その一つとして、2日目の登山に当たっては、出発時の安全指導の前にグループワークの時間を設定した。ここでは、前日夜のSAPと関連付けて三瓶の自然を利用したSAPアクティビティとして提示し、個人としての目標と班としての目標を立てたり、ワークシートに記入したりする時間を確保した。また、登山中は男三瓶山の自然や、山から見下ろす景色に着目し、気付いたことや感じたことを大切に心にとめておくように促すことにより、頭と心を動かし、地域探究の視点や目的意識をもって男三瓶登山に取り組めるようにした。そして、下山後には、事前に立てた目標の達成状況、登山を通して得られた気付きや感じたことなどを個人で振り返り、文書を作成する時間と班内で共有する時間を十分に確保することにより、体験を通して得られた気付き、考えの自覚化、明確化を図った。

3日目の「地域人講話」の時間には、講話を聴いた生徒が地域課題を見いだすときの手がかりとなるようにするため、自分の地元や身の回りの大人の活動との比較を聴き方のポイントとして提示した。なお、今回の講話の実施形態は、高校の引率教員と相談の上、「ワールドカフェ方式」をとることとした。その意図は、1回の講話で各地域講師の話聴けるのは各班1人になる状況を生み出し、生徒が班の代表として責任をもって真剣に講話を聴こうとする意識と態度を引き出すことであった。また、各班の代表生徒からの報告を介し、全ての班が合計4セットの講話を通して12人の地域講師の講話に触れることができるようにするために最適な実施形態であると考えられたため、採用した。そして、事前の打合せを踏まえて高校側で作成、準備したワークシートを活用することにより、生徒が思考を整理しながら講話を聴くことができるようにするとともに、講話を2セット行うごとに自己内省の時間を設定することにより、生徒の気付きや考えの整理の時間を保障し、講話後の班内での情報共有を円滑に進められるようにした。

4 参加者(引率教員)へのアンケート結果

(1) アンケートの集計

(%)

	満足	やや満足	やや不満	不満
事業全体	100	0	0	0
プログラム	100	0	0	0
運営	100	0	0	0
職員の対応	100	0	0	0

(2) 参加者の声

① 参加した高校生の声

地域探究プログラムとしての要の活動を通して得られた気付きや学び

【男三瓶山の学級別クロス登山】

- 三瓶山の登山が思ったよりもきつかったけど、景色がきれいだったのが印象に残っています。
- 運動は得意ではないし、正直とてもきつかったけど、山を登りきった時の達成感がとても印象に残っています。
- 登山は一人じゃ無理だけど、友達の声援・サポートがとても効いて、仲間の大切さを強く感じました。

【地域人講話】

- いろいろな立場でいろいろな仕事をされている方のお話を聴くことでそれぞれの方が課題に感じていることや、仕事に対する思いがあることが分かって良かったです。
- お話してくださる方々のお話が興味深く、地域への想いが伝わってきて素敵な空間でした。
- 大人の方がすごく幸せそうで好きです。
- お話を聞いた全ての方が人間関係やつながりづくりを大切にすることをおっしゃっていて、人間関係やつながりがないとなにもできないので大切にしたいです。
- 「少子高齢化」は海士町の課題でもあるので、大田市（三瓶周辺）は海士町と似ているなと思いました。
- 地域で活動するときには、自分がやりたいだけでなく、それで地域の人にどんないいことがあるのかも考えたいです。
- 自分で課題を調べて、「あーこういうことだったのか」と新しいことを知ることが楽しいと思えました。
- 自分も、海士町の好きなところをいろいろな人に知ってもらうために、企画を立てて実行したいです。
高校生だけではなく、中学生や小学生、地域の方々と一緒に歩いて地域を知り、交流を深める会をつくりたいと思いました。

【石見銀山フィールドワーク】

- 地域の方が自分の地域を大切にしているのが伝わってきて、私ももっと地元を愛したいなと思いました。
- 自分の地元はどんどん再開発が進んで昔の建物が消えているのに、石見銀山周辺は新しくするところは新しくして、残すところは残しているのが素晴らしいと思いました。

集団宿泊体験研修全体を通しての気づきや学び

- 島外生との心の壁がなくなりました。これまでは島内生とばかり一緒にいましたが、キャンプでは島外生と関わることが多く、たくさん話して交流ができてよかったです。
- キャンプを通して、仲が深まった人もいたし、新たな一面が見えた人もいました。
- みんなとの生活はあまりにも楽しかったです。みんなの人間性にふれることができて、もっと合宿をしたいと思いました。キャンプが終わって家に帰ると急に静かになって寂しかったです。
- 集団で何かを成し遂げたことや、誰かと話す、聴く、書くのを繰り返したこの時間は、これからの学校生活できっと大きく影響すると思います。
- 自分で考えて行動しようとするようになったことと時間に対する意識が変わったのは自分の成長したところだと感じます。
- 全体を客観的にみて行動しようと思うようになりました。
- 集団行動の中で守るべきことをきちんと守ることのできる人にならなくてはいけないと感じました。

② 高校の引率教員の声

- 活動中の生徒の表情が良かったです。
- 最終日にはスライドショーまで作っていただき、感謝しかありません。
- 細かいところまで打合せをしていただき、職員の方の対応がとても丁寧で安心して生活できました。

5 成果と課題

《成果》

○ 当所で行うオリエンテーション合宿日程の基本形を構築できたこと

過去2年間、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受けて計画どおりにオリエンテーション合宿を実施できなかった当所にとっては、連携先の隠岐島前高校の理解と協力の下で計画どおりに合宿を実施できたことが大きな成果である。また、「地域人講話」に代表される当所と三瓶周辺地域ならではの人や事物と出会う活動を取り入れた地域探究プログラムオリエンテーション合宿の基本形を構築することができた。

○ 生徒の探究的な学びへの意欲の向上と実践活動の手がかりの獲得の支援につなげられたこと

生徒の声にあるように、多くの生徒が地域愛にあふれる人々との出会いを通して探究的な学びの楽しさを実感し、高校に戻ってからの実践活動への意欲を高めることができた。また、当所がある三瓶地域と高校がある海士町の地域課題の類似点を見いだすことができた。さらに、実践活動時に留意すべきこと（地域にとってのメリット）に気付いたり、異年齢の人々を巻き込んだイベントを企画したいと考えたりすることができた。この合宿は、これらの生徒の様子から、生徒が高校に戻ってからの実践活動の手がかりを提供する機会とすることができた。

○ 生徒の良好な人間関係構築の意識づけと、人間関係づくりプログラム発展の可能性を見いだせたこと

生徒の声にあるように、多くの生徒が男三瓶山登山を通して、集団で何かを達成することの喜びや仲間の大切さを実感した。また、この4泊5日の集団宿泊全体を通して、島内出身の生徒と島外出身の生徒の積極的な交流が促進されたり、仲間の新たな一面を知ることにつながったりするなど、生徒にとって人間関係を深め、より良い関係構築の意識付けを図ることができた。

また、人間関係づくりプログラム SAP と男三瓶山登山を意図的に関連付けるとともに、ワークシートを活用して事前の目標設定から事後の振り返りまで丁寧に行うようにプログラムをデザインした今回の取組については、人間関係づくりプログラムの今後の発展の可能性を見いだすことができるものであった。今後、今回の取組事例も参考にし、当所の教育テーマである「自己を見つめ、他者とつながる人間力の育成」の実現に資する集団宿泊研修のモデルプラン作成を推進していきたい。

《課題》

○ 当所での合宿中に実施する活動の厳選と高校において行う実践活動の支援の充実

来年度の地域探究プログラムのオリエンテーション合宿は、高校の希望により、3泊4日に短縮する予定である。高校から当所までの行き帰りの移動時間を考慮すると、実質2泊3日での活動になるため、活動を厳選することが不可欠である。今年度の日程を踏まえ、「地域人講話」を要の活動に位置付けるとともに、要望に応じて人間関係づくりプログラム SAP や男三瓶山登山を組み込むことにより、新入生合宿としての側面も満たすことができる日程にしたい。

今年度のオリエンテーション合宿後に高校で行う実践活動については、意欲付けを十分に図ることができなかった。来年度は、地方ステージ出場者の輩出を目指して生徒の意欲付けと生徒や教員への支援の充実を図りたい。

○ 「地域人講話」の講話内容の焦点化と後のまとめの時間の充実

来年度行う2泊3日程度の合宿においては、「地域人講話」の時間が探究のプロセスを疑似的に学ぶものとして重要度を増すと考えている。そこで、地域講師には、お話いただく観点をより焦点化して依頼をするとともに、生徒に各講師の講話テーマをあらかじめ提示することにより、生徒が見通しをもって講話を聴けるようにしたい。また、講話後のまとめの時間の実施方法については、検討する余地がある。限られた時間の中で生徒が課題の設定や情報の整理・分析を体験できるようにするため、講話内容の整理の視点や班内で協議した内容を全体で共有するときの方法について、高校教員と相談してより妥当な方法を取り入れたい。



初日：SAP①の様子



2日目：登山の様子(その1)



2日目：登山の様子(その2)



2日目：登山後の振り返りの様子



3日目：SAP②の様子(その1)



3日目：SAP②の様子(その2)



3日目：地域人講話の様子(その1)



3日目：地域人講話の様子(その2)



3日目：地域人講話後のまとめの様子



3日目：地域人講話後のまとめ発表の様子



4日目：石見銀山フィールドワークの様子(その1)



4日目：石見銀山フィールドワークの様子(その2)



参加した高校生集合写真(4日目夜のキャンドルのつどい後)